

木村 實先生を偲んで

木村先生と初めて出会ったのは、私がまだ東京大学法学部の学生であった1979年末頃のことである。翌年4月から助手として国際法の研究生活に進むことになっていた私は、既に大学院に進学されていた先輩に誘われ、法学部の研究室で毎月一回開催されていた「国際法基礎理論研究会」にオブザーバーとして参加させてもらうことになった。研究会には、既存の国際法学の方法論を批判的に検討しようという意気込みに燃えた若手の研究者が、大学の垣根を越えて結集しており、毎回白熱した議論が繰り広げられていた。その中に、まだ30台半ばの木村先生も主要なメンバーの一人として加わっておられ、フォルクス・ヴァーゲンのゴルフに乗って颯爽と現れては、研究会で鋭い発言を繰り返されていた。当時の木村先生の印象は、ダンディーだが近づき難いクールな先生、というもので、実際、個人的にお話をした記憶はほとんどない。

木村先生と親しくお話できるようになったのは、それから10年以上も経った「国際法理論史研究会」での活動を通じてであった。同研究会は、1989年に故田中忠先生が立ち上げられたもので、19世紀ドイツにおける国際法の実証主義理論を原典に則して内在的に読み解くことを目的にしていた。専修大学に就職したばかりの私も、同年代の親しい研究者と共に、田中先生のご指導の下、隔週ごとに開かれる研究会の準備のためにドイツ語文献と格闘する日々であった。研究会の支柱であった田中先生が早世された後、研究会の存続を図るため、田中先生とは親友の間柄で、歴史に大変造詣の深い木村先生にもメンバーに加わっていただくことになったが、そのことが、私にとって、木村先生との真の意味での出会いとなった。

木村先生のご研究は、主に、次の二つの分野に関わっている。第一は、

伝統的な国際法の基本概念の一つである「国内的救済の原則」の歴史的形成過程とその今日的機能の研究。第二は、「国際法の父」といわれ、その後の国際法・国際法学に多大の影響を及ぼした17世紀の思想家 H. グロチウスの研究である。

第一の研究対象である「国内的救済の原則」は、国家責任法の一分野として、外国人が在留国においてその身体・生命・財産等に損害を被った時、その者の本国が在留国に適切な救済を求める権利としての「外交保護権」を制約する原則であり、古くから、その機能・概念内容等をめぐって論争のあるテーマである。木村先生は、この原則の歴史的形成過程を扱った論文（『裁判拒否』概念の継承と機能転換—私的復仇から外交保護へ—『法律時報』55巻9号、1983年8月）で、中世末期の私的復仇やそこから発展した公的復仇の制度にまで遡り、18世紀末に至るまでの学説、国家慣行を対象に、当時の「裁判拒否」の概念を明らかにし、それと後の外交保護制度における「国内的救済の原則」との継承関係、異同等を詳細に分析された。また、それに続く時代を対象とした論文（「19世紀英米国際法体系書における外交保護理論—W.ホールを中心に—」『埼玉大学紀要』35巻2号、2000年3月）では、20世紀初頭に米国とラテン・アメリカ諸国との間の国家慣行および学説によって、今日的意味での「国内的救済の原則」が確立していく前段階としての19世紀における同原則の展開過程を、当時の欧米の主要学説を丹念に分析することで明らかにされている。

他方で、「国内的救済の原則」は、今日、伝統的な外交保護制度に止まらず、普遍的かつ一般的な国際人権条約である国際人権規約を始めとして、欧州、米州、アフリカといった地域的人権条約においても、人権委員会や、人権裁判所の管轄権を制約する原則として、広く取り入れられている。木村先生はこの点に着目され、特にヨーロッパ人権条約を素材にして、人権条約における「国内的救済の原則」と外交保護制度の下でのそれとの機能の連続性および相違点を分析され、従来の外交保護制度との関係で、また

人権諸条約相互間の関係で、調整を要する問題点を指摘されている（「人権条約の履行確保と国内的救済の原則」広部和也他編『（山本草二先生還暦記念）国際法と国内法—国際公益の展開—』勁草書房，1991年10月）。さらに、以上の外交保護制度、人権条約の下での「国内的救済の原則」の機能の分析を基礎に、当時、国連の国際法委員会（ILC）で作成作業が進行中であった「国家責任に関する条文草案」を批判的に検討され、それぞれの制度の持つ歴史的背景および妥当基盤の相違を無視して、過度の一般化を進めようとしている同委員会の法典化作業の問題点を指摘された（「国内救済原則の機能の多様化」『埼玉大学紀要』32巻3号，1997年3月）。

第二のグロチウス研究に関しては、1983年10月の国際法学会秋季研究大会報告を基にまとめられた論文（「グロチウス『戦争と平和の法』における合意論」『国際法外交雑誌』83巻1号，1984年4月）で、国際法の拘束力の基礎である「合意は拘束する（*pacta sunt servanda*）」を最初に基礎付けた学者とされるグロチウスの合意（*pactum*）論一般を対象に、その合意論がいかなる位相で展開されているかを検討された上で、グロチウスの議論をその時代的文脈を無視して近代の議論へと接続することの問題点を指摘された。また、グロチウスの『戦争と平和の法』研究の日本における水準を示す共同研究（大沼保昭編『戦争と平和の法』東信堂，1987年2月）では、第11章の「諸国民間の合意—条約、敵との間の合意—」を担当され、上掲論文で展開されたグロチウスの合意論一般が、条約、特に戦争の最中における敵との合意という各論部分でどのように具体化されているかを、原典に則して原著者の議論を正確に把握するという基本姿勢の下に、丹念に分析されている。同書はその後、更に検討を加えられた後、オックスフォード出版局から、Onuma.Y. ed. *A Normative Approach to War — Peace, War, and Justice in Hugo Grotius —*, Oxford, 1993）として英訳出版され、国際的にも高い評価を得た。

木村先生のご研究の中心的な関心は、国際法の下での国家と個人の関係

であり、その研究方法は、常に歴史的な文脈を重視されるものであった。法現象をその歴史的な文脈から切り離し、表層的な現象の描写に終始することを強く拒絶されていた。こうした方法面での厳しきゆえに、先生は必ずしも多くの論文を残されることはなかったが、その歴史に対する深い洞察と鋭い問題意識は、私を含め、研究会で一緒にさせていただいたメンバーに多大の刺激を与え、そこで先生から学んだことは、私にとっての掛け替えのない財産である。

木村先生から私が学んだことは、何も学問的な側面に止まらない。木村先生とは、先生が2001年4月から専修大学に同僚として赴任されることになって以来、ますます親しくお付き合いさせていただくことになった。専修大学では、2003年5月に国際法学会春季研究大会の開催校を引き受けるなど、仕事面で一緒にする機会も増えたが、常にわれわれ若手教員に繊細な気配りをされ、決してご自分が前面に立たれることなく裏方に徹することで、われわれの仕事を成功に導いてくださった。もうひとつ私にとって忘れられない出来事がある。2002年10月の国際法学会秋季研究大会で研究報告をすることになっていた私は、報告レジュメ提出期限の前日、既に出上がっていたレジュメをプリント・アウトしようとしてパソコンを立ち上げようとしたが、どうしても立ち上がってくれない。頭が真っ白になった私は、10分ほど黙想して気を取り直した後、パソコンに詳しい木村先生におすがりするしかないと考え、お電話で相談することにした。先生は「それは行ってやるしかないな。」とおっしゃり、ご自分も多忙でいらしたにもかかわらず、2晩も家にお越しいただき、秘術を尽くして壊れたパソコンから学会報告に必要なファイルを無事救い出してくださった。私なら同じことができたかを考えたとき、他人の苦境を救うためにここまで親身に対応してくださった先生の優しさ、思いやりの深さは、人間社会を相手にしている法学者にとって、なくてはならない要素だと、心底から実感さ

せられた。

木村先生は、また、権威・権力におもねることを一貫して拒絶されてきた方であった。お若い頃のことを知らないわれわれの世代も、先生がお亡くなりになるまで、まったく変わらぬ自然体の批判精神を頑として持ち続けていらしたことはよく知っている。木村先生のような生き方は、紛争が収束した後に大学で学んだわれわれの世代にとって、一種の憧れであった。私など、到底こうはいかないなと感じつつも、やはり木村先生のように生きられればとの思いは断ち切りがたい。自分に期待されている役割と、自分の気持ちに正直に自由に生きたいという思いの葛藤に苛まれたとき、木村先生なら何と言ってくくださるだろうか。「それは森川君が自分で決めることだよ。」

4月に木村先生を亡くし、7月に実父を亡くした私にとって、父と兄とを同時に亡くした悲しみで一杯である。今でも、先生がお好きだったスコッチを手には、一人で思いに耽っていると、幾度となく一緒に飲んだ先生の記憶が甦り、ニヤリとしながら辛辣な言葉を吐かれる、あの先生のお姿が目には焼きついて離れない。木村先生から受けた薫陶を、私よりもっと若い世代の人々に少しでも伝えていくことが、今の私にできるささやかなご恩返しであろう。

木村先生、本当に安らかにお休みください。

法学部教授 森川幸一